



山姥井  
後香  
被





山之井春部



福田文庫

元日



改字 藤原乙彦 二酉精舎

氏安切地院

門祓棚

かきり縄

古物 信物

きり指

弓指 年男 大少

鏡餅

し肴 門松 少り系

きり

ふね 板鬼板 たま

よりく



何れ玉れ逢立物心とほり

祓ぐきり松のふり入り

ら世々々素をこしふきり

ぶ海がふらぬ乃とこく

にたりきて。是年と新穀



九をれその上まは。四方洋  
 小物稀あり。故る敏多る。  
 地下より。あつし。沙汰一  
 知へ。さ。日。さ。た。も。作。し。  
 されん。其。見。し。つ。の。海。方  
 山乃。い。津。と。あ。く。う。ち。か。と  
 ち。く。の。み。あ。く。た。も。采。る。家  
 氣。氣。げ。き。つ。さ。し。る。く。ん  
 此。沙。に。く。の。隙。を。も。海。池。乃  
 洗。餅。を。さ。ん。く。り。ら。給。て。  
 いと。せ。の。り。け。も。く。海。を。ま  
 家。志。周。る。の。祝。儀。と。も。さ。さ。り  
 茶。の。其。ま。あ。と。お。て。不。死。の

茶。志。酒。を。む。や。り。ぬ。や。り  
 くらん。と。と。や。ら。さ。し。て。  
 地。が。く。く。さ。り。ま。て。い。く。く。  
 外。の。志。か。か。さ。り。肉。ま。の。地  
 日。り。あ。び。と。と。む。く。庭。ま。の  
 庭。か。ま。い。と。う。あ。く。ら。く  
 と。あ。ふ。さ。く。う。あ。い。や。び。と  
 かり。死。乃。わ。り。び。ま。や。何  
 わ。と。つ。ひ。む。ひ。庄。屋。れ。一。書  
 子。も。と。海。を。さ。り。ん。何。り  
 こ。さ。だ。い。あ。う。と。れ。く。か。ご。う  
 はん。こ。い。つ。も。て。た。ぬ。ま。ま  
 ア。し。あ。よ。何。り。の。海。地。ま。と

つと後志の龍と云出れり

あまのりふ下部がつ

も。うひ乃遠れをさいせ

が。ささしとれをそせ。

日名きり所龍又なま。

祠のえん花やうにひとせ

乃始<sup>うかえん</sup>のふおん。さけ

きうくもれりりりり

あ

所のらいひりりたること

一中ぬいりりりりりり

かまぬいりりりりりり

あまのりりりりりり

龍<sup>きん</sup>の風<sup>かぜ</sup>新<sup>あらた</sup>甚<sup>おそろ</sup>乃<sup>すなは</sup>所<sup>ところ</sup>とくれ

志<sup>し</sup>ん念<sup>ねん</sup>のん<sup>のん</sup>花<sup>はな</sup>代<sup>しろ</sup>つ<sup>つ</sup>あ<sup>あ</sup>例<sup>れい</sup>は

りさやがにむる日つひ花乃<sup>はな</sup>と

日十二乃と

あまのりたまの今とくわく十二神

あまのりたまの今とくわく十二神

あまのりたまの今とくわく十二神

あまのりたまの今とくわく十二神

図来

あまのりたまの今とくわく十二神

あまのりたまの今とくわく十二神

あまのりたまの今とくわく十二神

あまのりたまの今とくわく十二神

つりーふんを

曾父殿母方親と成り申す

万相のゆるゆる日やめさる際同

新宅を作て。元日より

しきまー志行けるに。

何ぞつけし愛とるも乃

ろとゆるく

をけりし料理新長年より同

正保二冬の元日よ

嘗て三守乃永代と初書外書

茶や志と申すはあさうく同

さる娘の誕生日よりなる書同

あいまるえいさるあじ門の松林甫

申立て通する物や門乃松道長

春れ日や老の源氏の二ケ日 元保

二夜さらやまは月おる神れ長一系

事や九万八千五十年れどの書常倫

あはるえいさるあじ門の松林甫

門松より海勝する礼志の外屋信

雪あどある朝はさる娘をん

福りくつことり。年徳の白

本綿花ともいひさる松乃

肉は海魚はかさぐりといひ

あしはせり。初めはあじ

こがれ書あどめくく

りひる

かきくりにけし風はうわいの言はるる三  
けきさるひなほはるる言はるる春風はるる

鳴鳥とりりり可なりよんごうん

乃孫堂轉起せしと園東

より吹せ入りりける。

ゆきの元日よ

何じごうす雪まかせら風同

ありくもかりきりるるやまはるる可れ

門松も大本とるれりよの取發

文千ハせりり元日に用ハ

ゆれども近年季の視を

らりく竹筒乃ゆれのとけいこよ。

風流とせりり出りりも。治

まの町をばく新あごこ

ひひるるどつれ日忠風う

せ少く事れどけりり地も。

子里乃外もわまのぬき酒海

とありそへ竹の園うらやもなんぢ乃

乃登らりそへ係あも。鏡きやうし

てばらぬあしり

風風と出よのといきこもれ

々よるるかへおひじとるれ

去逢らりも備さるるたきこも

寛永やあけせにれりり

生逢園るりよらりり  
るれとくーやりりれ元日

成るわん

年と日とみくらう何ぞやけしき福  
 年キトクなまらう何ぞやけしき福  
 都よびる正月よびの世乃はゆり  
 かりるるゆりもぞやけしき福  
 ち。あめがこゝろいこゝろいこゝろい  
 吹たのしごとなるけり。物々の  
 福のあまらうもいひつひらぬ  
 かさむあどりの花ひらき  
 まめらもれういあどり  
 いん流るる家こゝろいこゝろい  
 ことくさるるもいふ家  
 くれぐりんかひ出く白  
 あけけくぬぐ。さしこゝろい  
 にくかたは何もうりに候し  
 うらぬぞぞりあゆむくま  
 ーや

立春

美酒 つみ井開く

四方れらる

乞へもくらう喜んる日よれど。  
 谷うらちあるうひせ葉の第もひい  
 や日びよ夢かしく妙の  
 はらうもそくく。想きんしつを思よ  
 まがよ喜まらう。柳よやうの  
 携こしらはけさうく風よ志らひ  
 ま。まねまね梅もらせが

よあつことえがわーしてよ  
 海づのびくうにゆきりなれ  
 んをきくう。元日もひと  
 くれど。まうしんるさうぬ  
 知とあともいられぬ。うれ  
 毎にううてが。はらもむる  
 色ー

春ふらふふさううもがう縄

ふまにふふらううの目定那

めくあれせうううとるれ花のさき

あ氷とら大裏よみ日あつ

たうう。流生<sup>あひんまうり</sup>れ方の井と

純して。あうて。主水の

うとくふまううとせきと

はくこ井くくくくものう。

いまふまきうぬとーれ

元日よふ。まうきき事う

けくん。ま考れ日まう

ありとーや

あ水にまううぬはるん

ままにぬううゆれと

ぬあそらうじあ水うて非常倫

子目  
 うさ葉あ松 ひあこまう

あ松 女ま 男松

いさう松 葉葉松

子日乃極びいそてなんく



野老よあはれくおををひさ  
 くれ人ともいらいら  
 りりとう。松根よ儼々  
 擗とまれん。子年れみとう  
 子よこそつこも  
 志よひえれてお海代や  
 人あざとらあり。継體神  
 にも。男ハ女松り騰をすり。  
 女ハ松あづつにひくあど  
 りひあつる。あまな  
 も松をじゆとあもゆれ  
 と。も。はる香乃ん津ねの目。  
 せんぞりかつり寝ちび

うあくとゆらーゆら

松ひらけ海はあま子日或悪

むつこ日日子日ぬれい

五月れ子のこもつひと日あ品如

子日七日よそゆりすと

松ろも芥れ祿のひやひき者休甫

若菜  
 おつれ 松れ坐 すま  
 すま考 ちぐ うみとれ

くくちあ入お七さうまが

うくく

昔きよづうくぬら

まやんも袋をさびてかつ

るぶおはしとらん海

い京の町まひひさめがが  
 ぐりもてこころは成買  
 て唐ちのちとありんれ  
 せよよこつてわさあにとる  
 乞とうちんやれされば  
 鼓うけけく。権りごり  
 きこくも。も縁よをゆる。  
 羨みし潤しるをりより  
 葉刀のふれも。うめー  
 として。くそあどもつひ  
 那色うりややせらさ  
 としるもの。仏の坐ハ蓮  
 可もてつ。新葉ハ神

の藤よもしむるふあど  
 又しうふれちと契と  
 て名づけ。上古れち人  
 と契し。款を祝しゆられ  
 せんん人。ちんま。や  
 張さす。や上。た。い。ち。う。東  
 上。れ。葉。も。ろ。く。七。種。の。木。ち。東  
 ほう。う。た。た。た。ひ。つ。い。よ。れ。う。お  
 お。は。れ。さ。ひ。く。あ。う。ち。東  
 しろ。那。せ。の。志。行。一。一  
 鏡。母。長。鏡。ち。あ。ん。つ。い。の。葉。正。章  
 せ。ら。わ。ら。え。て。ふ。は。坊。つ。ら。葉  
 ち。く。葉。つ。ひ。ら。う。ち。ま。葉。島。長

とうめいなる事やうが仏の密目  
 志をせしこころすりまも  
 てとれらる一とれと  
 うのありうらまへてしきりおれ  
 かり神よすれしつゝもさんがう元次  
 りよの白るれせらあうしく  
 作る。美子ののえらんが家  
 とあへん。ぎ井よりゆくと  
 りひてい。龍乃釣くともう  
 うひ。麒麟あとしりよせて。  
 七巻とともあぬらんて  
 りひゆる  
 わとを井にやち龍乃釣良保

三球打

ころとんと 喜あはれ  
 ひー花びらわくせと

禁裏 仙洞 如雲

上右いづら一穂打を神泉  
 荒うそやさ何けは成就ま  
 池にしきや物一はさし  
 されどと町がこれあ  
 けーん。こた白かさうしし。  
 屋らち乃ゆづり美もあぶ  
 ともよそそき家松竹と  
 一川ふあそく彼るりり  
 作る。常扇あど繕つて  
 風流をみー。すみ是れ何さ

晴あつさちなるよきそくしむく  
 かてしやんじやあつんと  
 らや。昔むかしはよもわげり  
 家いえさればいひのさへう  
 としちかたさかたかたか  
 やとていへばとととと  
 つけちひのけいじちちち  
 響ひびももろくしてさへい  
 せり

いかもたうとていへば  
 ちつし十言じゅうげん乃の終しゆう月げつ見み  
 ちつしつ。昔むかしはみち  
 きらぬけいひのけいじちち  
 よもわてつりたれと

たけりたけりたけりたけり  
 余よそたふるむらちくた。あつ  
 風俗ふうぶくよはははははははは  
 りしすはははははははは  
 されむらむらむらむら  
 とあひあひあひあひあひ  
 千町ちやう万町まん乃のちたひのめ  
 ちりいひははははははは  
 み一いっ着ぎ乃の着ぎまるちけ  
 乃のよよとけいさ乃の粥かり  
 するとて皆みなうらちけ

いせあひもとりてれらふ  
と。大形みあさくそ成ゆら

残雪

雪る 雪あつち  
しる雪 雪汗 雪あれ

しるきえ とつる

惟子雪乃村流とゆひら

かたしあつとつとあつて

餅雪のあまらるど。日の嵐

かづりさうとりのきそ

山姫の化粧をとらるげ

山姥志新踏もたくられ

らんるどもしりひあえ

新の雪りりたにるね

鬼尾も化粧をけらり

津く雪雪仏の淫嬖をとも

おとせらるるにりとも

りり。粒一あつるり

ひうひてる。雪あつ衣れ中

いれ乃もしももあし

らるるあにまへあれ

らるるあにまへあれ

依子らるるあにまへあれ

春乃氷の白足よけやう

き風のまにらあつて

らるるあにまへあれ

あづもり

薄氷とわらわら

鹿

又者 鹿の宮 鹿衣

一うとま きり

かか なる

秋のつらさにて 玄冥傍都

乃衣うとあや

うらさど。天女乃羽袖うと

うらさど。不動坂よりきり

見ゆる。火炎の煙より

あらう。あや

あや乃網といひる

深くハわかれ浦とんがけ。

あやをらしてハ茂苑

あや又目のうらさど

あやとりのくハ

あやをれハ

あやゆき

あやゆき

あやゆき

あやゆき

あやゆき

あやゆき

あやゆき

うそは元のまゝやきこれ紗の衣 加反  
と居うゑと〜 竹すこ  
ぬく〜きちら〜り

竹りり〜れん  
きよも中地やさる春歌を 正武  
十の八方らり海り〜る野正頼

鶯 金衣も 食方まき とう子  
さわる けつる花はく  
竹ま生る 箒 琴 方人く

法花經 三光よあく  
帯し〜ひいて〜梅も曲と  
さうら〜 琴と柳花苑とあき  
ひかせるり法花經とあくと

いん 絛らひとひいて 禱を  
ハ席品にのま〜りあ〜い  
お染るど〜り〜らりとし

るべての理をいひあ〜んハ  
い〜らやゆらん又い多禁  
中にハ〜を〜り〜て

高天れるよは去毎り  
くるともいひ梅着とのこ  
枕をか〜して 機窓の六宿

とあからぬら〜といつら  
とれつら言〜こや園の竹  
ハ華歌を言〜ら〜て作

言れ終はは花苑の在中 正武

こころもつらむき節のぞく長保  
春雨 このめらふいふ衣るるいめ

くせふびりきききもせで  
かりらるるさけりけりかとも  
うさびひさうらぬらうらぬ  
屋おとれりともいつり。  
永くとゆりつぐきまう  
様乃らふおもあといひく  
られさき柳乃眼と乾の目  
かどらうらかたやられん  
ともしひあせり  
かりの海ありけりあるる春はぬ

春風やうらぬ風のきかりるれ  
あつらわれけりあるる日  
きぬにけれうらぬけりあるる

梅 八重いとえ 花の元梅花の元  
完六梅 お梅 形端志梅

常宿梅 好文木 苑林 端首梅  
竹香梅 透梅 坐蒲梅 星之乃

梅らら 黄栌 かね梅 かりる  
白ふ すしえ 花は 小野

る度炭

かりりさめら は新服さ  
梅花よりらせ 葉射乃忘れ



毒もはげも。百果ハ沈乃  
わ。朽木ハ何罪よ。下へ入  
とじもひていふせ。これ呪り  
いひてし。字と香煙乃。所  
と。なるに。又。落の堂ハ。縁  
梅枝や。梅や。十文字。あど  
こ。とり。花。元。といひてハ。  
去。え。月。よ。ひ。く。た。也。乃  
あ。と。げ。ぎ。ふ。く。も。世。や  
き。ち。え。れ。あ。ど。こ。え。ん。残  
求。に。被。菅。乃。社。本。あ。れ。ば。  
か。く。梅。と。渡。唐。ハ。天。神。お。梅  
と。こ。こ。こ。ん。ん。の。お。れ。よ

と。り。そ。べ。ー。れ。又。を。中。お  
ハ。梅。れ。む。ご。り。に。お。ふ。れ  
い。と。と。と。母。ハ。子。騰。を。あ  
う。一。花。よ。子。管。推。を。あ。  
是。お。乃。百。事。と。そ。より。に

るん

わ。る。多。沈。乃。ら。梅。の。花  
梅。が。香。や。多。れ。な。こ。草。毒  
お。神。の。白。ひ。ぐ。つ。梅。乃。花  
手。ひ。ら。や。る。目。や。鼻。梅。花  
や。梅。れ。な。れ。つ。お。と。白。ひ。び  
造。梅。ハ。大。名。作。の。や。と。り。か  
な。り。毒。れ。を。一。鳥。と。り。か。な

お梅乃花ぞいけいそ末唐の  
お節より

お梅やうらな娘がぐんれお祀  
くはてんようれいそ末の湯も梅  
おと梅もいれの志んよたのいそ

心舟の一万の巻のり

佐わねの流も海梅のさくくお花

梅の雪今いそあるお節お正月

らる梅やこすあり 冬星の万回

うらうらえんれ花のりりし

とてりり入るおとさり

おのちりりお臺子れさし

あまゆりりりり

とるとういりやお梅もそお花

白ひもつやういそあつ園樹製

梅乃花さうに

うらうらよ梅も外梅お花

柳 新さき 系柳 五柳

柳 玉れさき 志んり柳

う柳 一柳 川柳

川さひやあき 岩柳 若柳

う柳 せり柳 柳が友

松勝 志んり みるく 白ひく

春風よけつる花地岸鞠場

柳ハさか娘乃あがかし

うらひとの翠今れあそと





あつちの袖も鼻をぬれさうや福元歌  
法蔵しりやわがけよあつちの法蔵

花 花乃歌 花の雪 花の枝  
花の海 花の舟 花の綿

花笠 花梅 花筒 花の杖

花の雪 花の雪 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

志賀

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

花の杖 花の杖 花の杖

百乃婿むこさうーさひひ孔子くしと  
 うふれおどひひさきも勝かち  
 うらぬれあふーあど  
 わうにめそきこふ心をか  
 ぬとりり

ちる花とさひひてゆくかた風かぜ

ひ白しろい定さだぬさ乃作しやくとすん

花乃陰かげまして酒乃小こ筒つつ

つささうりされん

大らる酒おさうぬ花のまい

たよりやさぬ海うみまひまぬ花はな

あはち家いへあふぬま風かぜさひり

あひらにわぬわわのちやう歌

花さうりそまよたかどわうれ山

う海うみさそ皆みなむわうが吉野山

みり野の花はなのさうりやうみ海うみ波なみ

襟えりちさうむよらやうさ花はなま

花ひとらなをらたさう海うみ子こ花はな

吹ふわく海うみ花はなやま風かぜたうらとん

八はちひひあううんさぬやぬれ信

む乃のさあやか忠ちゆう事じ子こ雲うん風ふう乃の肌み

花とぬさうさかともよのち及およの親おや

わくりにはらうさあらうよむれぬ

永ながぬりー花のちりゆらと

くれん

子こににうう親おやさうあせそむぬぬ花はな

らるぢぢつらんのからりや風車同  
らりらにいふ美人がらりへるあぢぢぢ  
短冊の風流うらなむをいふん  
紙心くええうらぬぢぢぢん急死保  
よき袖や長袖にる雪月か加友  
たどるぬ時めむいふわけは元寛  
花の初るべてあまきれ小梅うか  
むらむらる滝の音も聴毛く休前  
あぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ同

揚 山揚 家揚 糸揚 氷揚  
ふ揚 波岸揚 火揚 地揚

小揚 揚き地 くらぢぢ人 急死保

さうりやん たいさんぶらん  
善賢あ いせ揚 蓮揚 火揚  
揚うり 心魚 ひと人 ぶま  
白ふ火と花 ひくく笑らる  
吉野 金籠る 祇園 清ら  
あぢぢ 鞠る

春ハ揚ようううかされて人  
乃心いひのううらんりあり。  
松乃木玉ともありて。聖山  
とらびあつるん人火揚ハ  
物こかううともや火とや  
はとらひの糸揚ハよき門  
まつ連はらるれかうう

くり久し一りくもなや  
たどるもつひにこそあつ揚  
には車仲うやうあめー<sup>ふぢう</sup>  
親をのせく普賢<sup>ふけん</sup>ありーの  
まつひりおれあおとつひ  
るはれつせざくく神後<sup>かむご</sup>を  
よせ。彼岸<sup>ひがん</sup>揚よな。天<sup>あま</sup>ぬれ縁<sup>えん</sup>  
をむしひあしやうぞそく。  
りり旬よ新嘗よそんく  
そ他意<sup>たいうい</sup>あるんー

二季<sup>ふたき</sup>にさく。彼岸<sup>ひがん</sup>揚はなむらあ  
小揚のそあがらうらう春のぬ  
俺<sup>おれ</sup>んぞれせまはひささ入<sup>いれ</sup>り揚  
登<sup>のぼ</sup>るふと人<sup>ひと</sup>の海<sup>うみ</sup>ゆあさう  
をんくのやうに妃<sup>き</sup>ふれやあ揚  
一何<sup>い</sup>れよのあ万<sup>まん</sup>うよ

をくまむの玉<sup>たま</sup>のあけや花<sup>はな</sup>の露<sup>つゆ</sup>  
とふよと盛<sup>さか</sup>あふふふぞん  
小揚<sup>こあげ</sup>やかどいりあーん  
ま茶<sup>ちや</sup>とるるやもんよのあ揚  
のちうけや山のひまのたさく  
おーあさうんやうばく娘<sup>むすめ</sup>揚<sup>あげ</sup>正<sup>せい</sup>章<sup>しょう</sup>  
悲母<sup>あはれぼと</sup>の養<sup>やしやう</sup>ふあ梨<sup>り</sup>おけね  
さくさくさうさうさうん  
あさうとて

仏性<sup>ぶつじやう</sup>はあやあーやの物<sup>もの</sup>さき全



ふまよれ己の花ふふんをうまはれ  
花の味も、まの陰電さくさく同  
様をたのむ金せんいさくを良保  
花挿もつごごごり時様立圃  
まのくまはるりるは

まの川やう江て流るかいさくを池元  
やう江びまよーこのあういせ様 正伯  
糸様解の柄も庭もまよ正忠  
馬方ういゆる長保さくさく同  
おく山いすちるまが花かま様一箇

椿花 伊豆快 毛玉椿 つまは 櫻井  
花入 咲きけ 桜もら 毛玉花

又とりて毛玉とりのまをま  
りうらせし。腕抱欄珊あま  
りみるは。堪舞とらまよのま  
まに。まろくうてれおる  
抱るり。まに舞のまろりか  
ためしれどつひつらうし。  
れいせ様とびつりなまよ。  
まよりつふまか作意  
何ある

花の軒やまろ万がまれま様  
小様のまをいさくさくけり  
海橋のまよ乃京相奇連保乃  
命もれまよまよ授意何ある花

乃必とてとて人も何あぬく  
 見るれや及び竹れいつや  
 ともいひ出さるる真ま  
 へし。それとて大梅の花さ  
 らぬ故乃名ちりとりんぞ。  
 麝香いもこうれいぬざらくあど句  
 ひとさくめとく竹れと又さ  
 抽りしこも竹らあ。うも  
 所じうたえぬ程ふせぬか  
 かりにせ竹ら人き。児様ちりごうと  
 つもも小探とつあなを  
 こもとある。うれはがう  
 やうりしひまわりの。是

ふいさおとこころ梅へま  
 しがあとしつゝはあいつ  
 祈りひとつよそとたなる  
 色し。又梅曆うめいれきといふ。  
 まかだわやくんそえゆる。  
 されとてびくむ免ご  
 りとあどつひかおきハ詞  
 つまりてあふりしなと。  
 かつよきあ人くも  
 竹し。粒つぶち詞ハ後と知る。  
 俊とよなるぞよあゆ。様の花  
 ハとも志れくかそへるく。  
 奇怪きがい不思議ふしぎの名とてい此

字一竹懶諧乃たれ唐人の  
 とくまれの何ものよても  
 りてふれど。も。かぬ  
 人類的く。作若れ換りも  
 ありぬ。又。臨安と菜  
 て。うさ。と。百。句。あ。と。つ。ぬ  
 出。し。ハ。別。乃。事。あり。し。  
 雅。之。花。ハ。何。く。し。其。は。い  
 さ。う。な。と。に。坐。安。一。さん  
 り。し。ひ。つ。らん。ハ。又。身。に  
 へ。し。い。し。い。や

海棠

福あまらる

福あまらる花といひ竹ま  
 人乃目いさしる詠といひ  
 や。明。特。れ。友。人。ん。ん。も  
 っ。り。又。海。乃。も。も。ろ。人。除。全  
 っ。業。は。つ。ま。ん。ん。あ。る。事。を。も  
 り。新。作。り  
 へ。さ。き。れ。お。つ。る。い。ひ。さ。う。花。乃。風  
 へ。さ。る。花。乃。さ。う。り。の。月。を。花  
 梨花 ちうのこれむ。こ。あ。れ。む

花といひ梨。肩とあ。つ。る  
 知。も。梨。乃。し。と。や。う。り。の。そ。の  
 ぶ。と。う。へ。て。も。い。ひ。是。白。く

こふゆれはちり志く庭や  
流るし地とも思ふせり  
花も又ちり志く庭や流梨地  
ぬあひむら波ふたわとし保

幸夷

みさうりこづ。帆のこづ  
あともうへがき何かり  
こづ。行わぬこづ  
とひひけりもつあ  
ふれぬぬのこづれわん

春草

あまの 眉作 ほとれ  
あまの あつた えんや

しうまのまゝいんりん志  
口かむくもれは志あそく  
はめどもかまけりあそ海  
言に荷草乃うふ志けし  
くる。氣久なともいひ言  
きんわく乃花は志乃こ  
もてんもれへき久志も  
何くねと。小鼓乃音りそ  
名とり分て言れ節志  
こてもれ帯乃月あしうも  
いひあくるはよめがつあま  
いの中よりくね 俗説  
りりて。志うとめこれつ

うみづりひまじり 秋あそ  
とつひ又志るれこ乃流ま  
りしなるとも

中よりれあまれとあ嫂よつら

志原の子にらするまやあうら

えんれれあ相らあまらう

たんりれ心くそ病乃そふ教を死

是れれらきとそらんらあ扶徳元

悲母乃追る者よ

生うのや親のかみれ眉まゆはかり

回文れあ乃あぬるさうさあ身

スやあせ根たにひくやまこ葉芽さ

鬼あさあはとつてりあありか

るにひひさそくゆら

くひひあーゆー

やなうさうけよああいこ

れらうけりさ

根さくはわさあ鬼にあああ集

はくくーあありくあり

とりあーしひひゆ又さあ海

さあありうさああり

はくくーつひよさああり

しひくともれさああり

うひゆれはあありえんも

あめるさあ

いられあまのまんあああつて

和色小清道一し

くさきもくさきぬはくじし番  
長林乃若の母にさるもあられ  
ぬ名ももゆきさるもさるも  
歌なもくさく月ひんふよつら  
ぬわさるやゆきんさる  
つと又調業乃あられさる  
遊ひ乃打つあどゆき  
めつらうきるにほぬくら  
すさひあふらうらさん

世歌

らうらひ かきらうらひ  
らうらひ さる 花

ゆきはな若きと作らるる歌

俳歌よりわくれさのあは  
りしあゆる又蕨手次  
れ流そがぐさ菜乃鏡臺  
あもむ乃らぶられかう  
ふにもいひあられかう  
らうらひ若きよりいひけ  
てびくにのわつらん  
ある物被置人よあつけぬ  
世れそらん歌とねむりし  
志業山いれさるあふ蕨水  
あつてあふらひらに澄見  
百足乃いれさるあふ山を究  
さるらひらに蕨水乃あふ

花の葉も人よかきしうひ賀  
はがきまゐる

花の葉も人よかきしうひ賀  
へはがきまゐる

花の葉も

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

山井

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

花の葉も人よかきしうひ賀

山吹や久しにみ家れたまのくま  
心癒きやういもやとめ花衣垂

躑躅 名はくしー ちつと  
連花つじ 餅けし

杜鵑花 下びり 如雲の櫃

春乃日永なるにやひん色

小原とえし 金籠小筒やう

れ相おわりひくよさびらり

くめかひんぐー山吹へり

ひくをいとにあらとみらる

と。夫と花り 餅べき潤

乃つとどともちとみれや

れく餅つてーあともひ

とそ 如雲乃山吹下り日と

くくして。白さ赤ふひ糸乃

久くちねかかさせん残

小神もぶんれはぼーとも

又山とつじわぶん袋あし

りひくけてそくこれ具と

色りー花 忘れくーの

乃番よめつるんごへり

まらりーはあふ家作とま

何とへー

如雲山とつじけーやぶん袋

福あひりそくくをららつ



わたりもあはれさきさづるあつた  
あつたはほほしけさや羊乳乳うしち

藤 ちくちくち ちんちん ちんちん  
ちんちん ちんちん ちんちん

はらちち ちんちん ちんちん

ふりふり ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

ちんちん ちんちん ちんちん

かへ向とうしやら友と志れふ  
心と信されをくりハいつた  
とどぐひゆふんをともりひ  
ゆるれかともくぐれよゆく  
とあくるる文字と忍ほし  
うかひあれもさうがこな  
ともとりひるせり

花うりもせんをりり七烟馬  
千室ひんらやあへてふり  
かりあひの境ぬゆくきもれを苑  
あがハ磁石針の如家后畜

維子 子母り  
子母り

やけ野 禁野

野山やく比ハ野あをれ書  
ふとのけりきてたのもんせ  
浅きんくともあふり  
こ。野にけりては穢巾を  
りんくも。洞乃やろく際も  
あく。萬木それゆやく衣  
ける物とせりひあふり  
物れされハ子とあふき  
ハ洞のやろくとも。野り  
わふてあん城やろく新  
あふり  
子とあふりハあふり

子ゆふやなげ野のうら花

胡蝶

ふゆく ちあふれふ  
舞 夏 福あり

ふゆくふ菜乃紫よとゆり。

花よ替りて余念なげ成

ひるぬのうき羽衣乃たも

とそひるぐへー。音とめく

らーいつく舞たりるくも

さ海。秋莊周が夏とよ替りて

こころふれ。この百まめあは

とらり

らるむやこそ秋夏の百福あ

はれぬらふらむつうらる

まひあのららるるは様もや

かんんれ結うこそよの夏はひ

とる花をてふ南あひの夏は

ゆふ中にあはる舞や児の舞

ぬるそ花夏あやひら下下備

種 ちりうらる かつるこひさう屋  
井子 田池 井内うら 萬代

かれくともあめてぬとこ

とひん。天燈とりふとひ

せむきさうられ屋う世と

控てすむ危りもとりあ

霧乃玉城かつきれ雲あも

いひけり粒あうらり

引こもり。井のうら氣を  
 だんごとくあふれどと  
 ゆる。又あよすむかづき  
 ありむとつらなるまに  
 見えしよ。そのがけうへび  
 あものもれて命をうん  
 じ。くさあてとすと  
 りあれた。丈丈二たれか  
 のうあともまきこしや  
 軍丈二たのかうあ  
 思ふはあふる心池の  
 猶吟ふ白きねよ

うら、師近あくらひを極か

名みか、かほのむや廻文あ  
 一ふの田と井はうらあ極美

三月三日

粟妻 柳 桃乃花  
 娘 桃 碎 桃 桃の酒

蓬餅 くさくら 結合 ひいあ  
 々 あま 桃乃花と柳のえさ  
 ひ し 純子 瓶子 あとにはけけ  
 人 り くら ら くら  
 うら ね ひ ら も り 月 ゆ 是 は 残  
 俳 諧 乃 は 桃 の 酒 と ひ は 傳 へ  
 ぬ ら 又 も 花 中 くら  
 何 る 八 股 乃 は 百 の 較 あ じ

よふせてきふれ霞白ふー  
 う家もゆるふのときもいふ  
 とはくくふのかくれ文もと  
 阿め家とえゆれんとんぐ  
 ろく是もくふの歌あり。も  
 へて管儀あどらふおの園その  
 の桃も六王母とせそく三  
 千条乃紫吹花やうり物と  
 しくふき門乃柳ななもなえん  
 めいがふとかりて命を延ひと  
 いふいあて。まふとんを  
 へふりさうも

花ももの東とう方ほうさうや園の桃

らぎつらほいとやうはる花餅はなもち  
 曲もはえんよある六桃花はなづかきもな保  
 うらまははかへもわもはは悪  
 やうひらるれ日長功ぬん  
 まうりちちよよきうきう乃  
 作しとたたもひひひききん  
 けりともあつとあこれ  
 ちるふことちちうう  
 かれり。ちるふもええ  
 けんドあつたゆとと  
 けらふふららきききき  
 わわくくてて節せつ儀ぎああい  
 つつんんちちよよななののんん。

も作あうらんむげの  
もりたりしとせいきれ

ゆきれん

ひのあぢひとりのり。四月  
乃何いさつちり一之尺  
りりぶ煙いあどいひて。四月  
がやうれ物よのまどがた  
あまは。そよ乃昔供とまら  
ゆく。大乳まれすあむとあを  
長若れとらひあも。ちらいと  
やうある。屏風志うらり。  
たりひげぶら物あつがむと

ちりりまうあひ。むいたの身

とれといひめぎことり。柳

のうらげうけを桃久あ  
なくにうららうがせつ

あまのこたうとー均

あやらふとせしあきうら  
らーとむけうりあひりる

は。うんしとるやまこ。ゆる歌。

ひなやころとらざいひれ  
世おあもれくひちらづめ

かんハあつた。又葉津り

鶏いづう乃たづめつよあ残えり

イがさくうらとせあつ

せめよとがまへれまくらに  
 まけけはらさかあまのり  
 ちげさゆるがうやうれ事  
 どもいひくしうそ白のほろ  
 ちくひるくはまあしと  
 の家ちくぬ倍難もやゆる

三月盡

やうひのくれ 卯のま  
 言ま

春のくれうは投券なれいろ  
 ひとねまれのうらまはさ  
 ほくそぐひろ移これりり  
 ぶあげりりもきそおろく  
 とこらなうくさくさうれ

うらまはさくひ龍よきこ  
 ゆうらうへ感ありつる花  
 づやもいふげらて庭の  
 かがりもこさむひーきし氣  
 久又ゆくまのあたる神ま  
 志ぐしつあそかりひあま  
 ねえ。無家のせふとちて  
 と驚鳴りりあげゆくま  
 のみおあさなと。わうん  
 ゆーきさくくさくひさま  
 善しゆきまかまは言ま

善言

善言  
 善言

山之井夏部



更衣 衣衣 ひとん衣  
あしきぬ うちを

つゝめき

ころもかへ宮中下く此  
御将衣束<sup>さうざく</sup>清敏<sup>しみん</sup>の法帳<sup>ほふぢょう</sup>のり  
びくまて衣此<sup>いし</sup>のちをひ  
みあらしきめ坊<sup>ぼふ</sup>のりとされ  
く女御<sup>によう</sup>もろふ<sup>ふ</sup>衣<sup>い</sup>のれ  
と<sup>かうの</sup>と<sup>の</sup>位<sup>い</sup>にもま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>家  
やあ<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>又<sup>また</sup>衣<sup>い</sup>の  
き<sup>き</sup>う<sup>う</sup>て<sup>て</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>と<sup>と</sup>た  
つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>書<sup>か</sup>と<sup>と</sup>衣<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>



あどもりの地をば 櫻乃  
衣の。まゝのわく 附も衣の  
らと志は

位より女御とくふ衣衣  
衣をよわらむきんあし衣の  
春と衣とありけせぬ人  
うひわめせらむ此衣如常倫  
衣擲あはる海あむかすひか  
ららむあはるむれ衣之玉  
ぬいさる春と衣とあつる即藤

灌佛

卯月八日八尺の嵐毘陀よ

て誕生し一たまふ心時夫龍  
くづりそあをそくまは伝よ  
けぶせまのあしとあはふ  
日るおん藤とあはふ  
あやうらにまををこふ  
ふれて湯守あし又あふ  
あてあはくまは事なると  
けりしとあり又まふ  
躑躅桜あどけま入るの  
はまけりつさる。彼花園れ  
うまきとあはふ  
るやうあはふやれ餅はく  
しあはつひあせり

仙もあはれうよあはれらつじ

卯花 卯花月夜 卯花衣  
川をひらき 雲をひらき

卯花の香 花散らすき

卯花は波りしと忍ぶとて

光のうし秋かともひひ曇

と木にふれあぐともり

はがゆる秋うの月れ秋と

のびちんく床を月能り

やももをきほとこぬら

きの花の色くりさく

され、おの、冬もさし秋

つとこがひあともつら

月雪に思ふせんと雪月花

一夜おのるともり

雪月を一夜に思ふ卯花

うはあはれかぞえ月うら

卯花の思とらいつかあは

新樹 夜こらり 木れあはれ

夜こらり 木れあはれ

うやうきあはれあはれ

ま珠りとりあはれあはれ

目のうらみともりあはれ

すべ、あはれあはれあはれ

日あはれあはれあはれあはれ



杜若

かきほづるいとりのみいり  
 流あつくい葉乃又さごと  
 がわねむれ音そいあつこ  
 めくりにゆみや植はる  
 めどもいづく。漢カキ漢ハ小野  
 あもよもゆれと花業平  
 のうとせそとつよやこ何  
 ねは秋能造のいついあつり  
 何よきもやねむれあささき  
 九のこもにまや八橋は杜若  
 名神のえりあやむ乃杜若  
 い葉れつくめんたこうかやな花良保

郭公

山ヤマ和ワとトきキえエ 花ハ乃ノ杜ト若ワ

うウのノ夢ユメ ちチうウとトあアくク

とらうりあく名葉かすぬ悲ひ  
 夢とあつまはまびりけ  
 とうして立花乃けり  
 かいらさくふあうと  
 と海。うつくしうみれ  
 ととに日さく。東次  
 のくぬわりの海。一夏れら  
 しきうぬふと守むん乃  
 とか。あふくとも山ヤマ乃ノ杜ト若ワ  
 ちくきほづるか

いひあしむを娶れぬつし  
さか金福王乃出世入りし  
うくべくしれ物りみおも  
かぎふ又ふぎきに福ふ  
とみあくとともりい  
らざれりし名ぬるあど  
とゆひひそしぬる日と  
かりとそくふし。月夜ハ  
こいのちをかくやくんも  
りひ。花かきうひたとも。不  
如<sup>が</sup>あくとあくこしつけ。  
地獄りすひとと書たん  
かひこいにのりぬともいふ

いひらんこもこと乃えん  
何あつこゆる

やどがりとおんまふ物き  
かきそんにけこけくぬ  
地獄うたしらうり子祝  
こいよいぬ中ぞこれ部  
かのれし中<sup>か</sup>あるえ乃や  
かすくやうれはあぬ部  
あまらにこまのれはぬ  
さ福とゆうはよあはくぬ  
いるハなまれぬやめ  
こいぬとわいんほ  
らづきぬ福ふたのやめ

嘗乃ちあり所なくとせけ部と  
かもたふあやりのわらん子規  
あふはなつらつりくよ部と  
又言うくつちとひあやま  
いりあ子規ももつ子規宗鑑  
いざくえん乃妻くよ部と長能  
まああまもつりあ部と

古神文法系

むしたるやむ死後なきも同  
とらむりあやらむと子規の目  
うたとあはれあはれ子規傳  
部と致わりのあはれつりて部  
一校ハ洋文と物ハ洋文ハ和

又音お通とせりことあは  
あしの子他と始つと  
くハ二つあどハ始つかり  
とゆりつとあはてく  
世にもいひあはれと。うら  
空耳あときらつくと  
或人のひろりゆり。  
そにくとあはれあは  
とよりあはれあはれ  
地乃りりはるとあはれり  
—こも。

あはれあはれあはれあはれ  
あはれあはれあはれあはれ

何れもいふ流氏乃きこれ名に  
 らせ。車あつさひ物のま  
 乃海流ともしひ。むねよ  
 つあてまつれけりしる。  
 うくわしきとたまわ  
 とし海らとをし物し。  
 又昔爰れ告わりてかえ  
 乃三つれの日人々あひ  
 樹のうづくみもー  
 けり。とをうづくみも  
 けり。かえり社目おま  
 使ふ。あつて。そよはり  
 ちやうあつたにけり。せ  
 けり。ききとつてねあ  
 物乃けり。むねあひのう  
 足り。や海り。うくみ。あ  
 来 あり。いま。や。祇園

卯尺ふ乃卯乃日いあり  
 乃正糸るれん八糸九條の  
 うら。こと。と。うら。い。か  
 ねひ。あ。と。し。七。倍。守。一  
 ゆる。東。寺。乃。法。守。と。く  
 の。南。門。を。ひ。き。神。樂  
 を。か。き。り。れ。つ。湯。倍。結。へ

うすまつる義式なると川  
たん。

人乃坐家うり。縞袴の  
か山松あどれ氣多し  
で乃し約多れと

いあり山あつりも庭はくし  
今言たふ祭禊ハき流ふ九日  
たりんし加とと神ハま  
祢があくハくすて近ふ比  
より十又日ふいあし約ふ  
此鉾指流り祢り物おども  
たかなる。是ハるれくもえや  
とにのりせし世中ささぐり

かりけるに。しりくあふり  
野しやしち定然と。  
教原長徳らふあとなり  
つ。何くあふこふまう  
海さ成よけるせしや。  
されん未乃世にもかたれ  
わうこれされともはば  
やふゆるんきりさよや

いまこるや乃御あつりれ目  
まつ事るや皆藤氏子の流野  
祢園と云い山鉾乃すしき。  
左敷しひれひききりふかん  
こ知ころゆり物さ山



何いふうあつる月が  
御本もえりくくくれ  
あががいれく竹枝は  
ける御園乃さ海づるさ  
れさひき。新式の志き  
次第あどすんで七日十  
日乃作はどもあけて  
いひさくまらく山ほの  
あどりうひて。あがら  
り。祇園をときふゆら  
でさくさくかきと  
あん

月がさる山はつらひか

祇園をやく二対あつた  
祇事ハあつた乃たし  
是く野々末山の奥乃室  
あもさつたつらとこあひ  
ゆるされとああひあ  
法式つらく。いまこく  
えいふに。つら文志る  
はよつ海あ。きく教  
乃月くえんされゆるか  
さり。あつた。さつらり  
去れあつたあつし

夏草花

芍薬 美人草

一八 射干 雁絛

鉄線 下野 茅子花 百合

昔も 鉄線と 忘れゆくは  
花の 行ゆく 地を 踏んで  
ゆくは 鉄線花乃も へくは  
ともし 何や うらむらむ 又  
酔やく 齋やく おもひ えて  
いつり。美人 草は とうら べ  
可きと せしと たら ぶら。

系枕 あくべして 見え やと  
ふひ。虞氏 うちく とうら ぬ  
病づら ぶぢんよ 手 かり  
すれ あど やうにも ひか  
見え やうんの 花は 虎狼  
乃 歎も せし べし とも  
志や ぐま くに とも びこ ねり  
とも いらひ ゆく

昔 業に いらひ 鉄線 とも 系  
こ せら いらひ せん とも 系  
私を 渡す 人の くれ 無めよ  
夏風 あり ぬら 一八の 花は ぶら  
お月乃 花や う物 とも いらひ ぎ 系  
と 系も 花は 下野 とも 系 系

て 門 せん 花火 乃 とも とも  
ひあ ー 風は や とも たり  
な とも いらひ せん とも とも  
と 系に とも せん とも とも

志約る

花火の光をいかに

見るの光をいかに

見るの光をいかに

見るの光をいかに

見るの光をいかに

見るの光をいかに

見るの光をいかに

見るの光をいかに

芥子花

くー袋 子重

きく酒味をいける家

世話をいひ又消す詞

にもろへていりうらへ

乃つちのくに髪生一

たる城くー坊主とり

とけ花のらりくる花乃

似こればかり。是おを

ばくぬるはへきまや

つる門まらり緋糸白の

芥子乃花三りてさ

はひひりる

清竹やきまがこ花衣

百合

さゆり 花ゆり 花ゆり

さゆり 花ゆり 花ゆり

さゆり 花ゆり 花ゆり

好りり日るる名をともせ  
 ゆかまに何くるあしやん  
 てもいひ文車ゆりれ花  
 のわづりともてんやし  
 鬼百合れ何るを教とも  
 りひこそぬ

姫ゆりの美命系名竹女郎

羞竹 こんか すろろ子  
 おくけ川けり

志らくえちく まるけ

志のひけり 脱破りりき

じろけいふ年がらり！

とるいともせけりけづる

ともいひさびら子いあふ

かく梅と出れこも竹

る乃角もともうこいひ

又やぶとけり志らくれいあ

大名竹乃世はぶたうどと

いひけりたをかこ竹姫竹

のみふはあくこもす

と求めゆるんー

へる乃さぬであうけは子を

すばいいたけりすわり水

女子竹乃あふにわろやうけこ

ねる赤いあふにわろやうけこ

教けの子とあふはあ育室

つらひやまをくわぬらう  
竹の子わいら竹の子馬の角意

橋 橋場とよみれ 柀子の花  
柀のむらさ

うらむれよびうーれ袖乃  
うわりのとよみさうりかた

あにづーうとこより  
あうりて香葉りしめに

かろう。曲まう洞れあるる  
あとうらうとるやとん

たら花のあかりをめで  
きい交物あもあうへあひ

とくのさあひさうつ  
とんゆーえとんをさ

徳元とくえん公乃性氏にもたう  
花もともうらうら

とあひあをせこー  
うー乃ぶれかさうらあ

いひひけゆえー  
うら花のあひさうあひ

乃むゆ系もうなむ乃首  
門とあひさうかじりあ

うらや政伝具乃よ  
まうは橋がなうら

五月雨

はつり 梅のぬ  
庭の海

しるふれおれへちるるも  
あり近ふ様とあり。  
ここの文家も海中の  
龍文博くと何やーまれ  
庭のねとろく汁の  
藻よあがひ井のうられ  
極と大海とあり。ちろく  
川も大井川と何さむき  
浪浪と地よるもやうふ  
その波も形をひらんと  
あふんぐへんおもあてん  
うりほぐくしていちちと

つひるん

五月雨、大海とるや井は  
しるふれや山家風とるん  
さされや鼓の流のねやあ  
五月雨のそよみんすこの山  
しるふれや晴るや乾むけつ雨は  
帝釈やうこころの旗も光

五月又日

湯やちまきくらんま  
何や根合、ホキ根

あやめ力 菖蒲湯あつりけ甲  
何やめろ昔伝はつこころ  
ぬまつく泥よまうがれん

糸ふねをひくくくくくくくく  
 こんらも東乃ゆ海もさ  
 やめたらとぎいふなりん  
 新のともやういよきらり  
 ねほりこそなうん  
 にからうらうら。らまきいぬ  
 ちまうの家これ嘉例。うす  
 だまやらやめあうつ  
 けりまりる人ころけらひ  
 ちやうぬ刀やか毛刀もて  
 取地よまうれる麻者乃  
 氣又あともく  
 ぬきこゆるのこれららるる  
 ぶとら取地は又月暮まらふ  
 ありひらまのあはらぬきづら同  
 わさちやめすくおをもつらぬ  
 ちむとそきいふもつじき  
 蒸蒲酢う橋の志にわたる水一葉  
 くのも又ほのくわれぬき  
 昔ハ一條たえ乃お南一  
 左右れ近衛乃る場何りて  
 三日より六日あてあ  
 はぐひやあてつがひとてる  
 にける事ゆつとそらこ  
 加美のくくくくくくく  
 月く朔日けりそら

ぬきこゆるのこれららるる  
 ぶとら取地は又月暮まらふ  
 ありひらまのあはらぬきづら同  
 わさちやめすくおをもつらぬ  
 ちむとそきいふもつじき  
 蒸蒲酢う橋の志にわたる水一葉  
 くのも又ほのくわれぬき  
 昔ハ一條たえ乃お南一  
 左右れ近衛乃る場何りて  
 三日より六日あてあ  
 はぐひやあてつがひとてる  
 にける事ゆつとそらこ  
 加美のくくくくくくく  
 月く朔日けりそら

又日ふあしとれ競るなりか  
於と将素乃こまの極る  
りうへてたまるいひん  
やーゆーそれうこれかふ  
はれ遊乃まてはくひとや  
まこ一申

かああし極るまきおつり久

かああまてるこあぬも  
かちこりりれく

今とにきうまをけひる

将素あそぬまにけけいぶ春あ

堂 とあるはれ火 堂の堂

接子小こころとをきみ

乃らひよらせ車ゆりり

とびりれと室か又こ

またひひあ日台れ山よ

とふと猿の鹿れ何りこに

くくへいまり山よらあめく

成狐火うと何やこことら

うれ麻糸がたあうとも

赤鈴乃玉藻のやへりひ

うりりしれともいひゆる

又月夜ういおとこ後をと

へ園うはえりをありやあ

あふふああさよ火とあ



と樟腦ウツクとくも川の漱中セウチュウ  
乃やいともやともいひ程  
早ともと名ありてすづる  
りー東ヅひ星なよむとも  
きこし申

高野山タカノヤマ言れやなもひまの  
かろいひもやなもひるんは  
あづこいともや言れまの郷  
あふまにひがれいする堂うか  
ほれ火いも藻のあれ老りか  
文字モジ乃れ鹿さかりの堂れ  
堂火ドウカ乃の漱中れあとい  
清キヨいぬやうは堂火いるあ

加友ととあつく探取よ  
堂をととりて浄家ま  
りいーらんを  
もと又半金せんぎんをとりた鹿しかなま  
らくする人れいとそ  
堂火いごいびがれ老り同  
月乃あ鹿やとあそと堂同  
堂火やも陰とそに月乃う守業  
りー乃浦り悔り  
ついでり  
あつとあーとと堂火れ一  
あつとくるとあつとて  
あつと

えあつぬや沈ぞのやるぬまの海うみ龍

教 杖柱かひ 争り火 ぐや

からやう 教

教柱といひて八は濠ほち粟あは花はな乃

濕うるりとくららやぐんとと

涼すず風かぜのうきここんんかかしも

りひ。又山やま星ほしれかひ乃の煙けむりり。

教乃のやうがととままわりり。ある

やれ新あらたの教のの系けいり。教乃

ととのややととんんははううきき。棒ぼう

かりかり虫むしれれ変へん化かててああれれる

ととううわわりりんんむむせせくくららきき橋

乃の下したああととたたききううふふししい

教の教のととてて森もり乃の陰かげ行ゆきの林

乃のりりふふくくここくくららきき物

ままらら海うみりりああおおりりく

んんととんんももももんん—

夕ゆふ風かぜかかううららととつつるるててかかのの氷

空そらううわわりりももああららぬぬ風かぜもも水

教ののの珍めづりりかかりりににぎぎくく紙し地ぢ乃

教のににももくくれれららししぬぬのの旗はた乃

かかのの色いろ四よ丁ぢやう四よ方ほうれれむむきき乃

加か友ともととととよよくく探たん取とくり

教のととりりて

ささららかかににびびししやや教のををぬぬうう運

物もの乃の葉はかからられれききぬぬのの教の地ぢ乃

寂<sup>ちやう</sup>真<sup>ま</sup>の火<sup>ひ</sup>風<sup>かぜ</sup>のつく又<sup>また</sup>新<sup>あらた</sup>か目

鶺鴒<sup>せうりやう</sup> 鶺鴒川<sup>せうりやうがわ</sup> 鶺鴒舟<sup>せうりやうふね</sup> うみく

ついで川

さつきやまの夜がりに出。

月よぬすもどりけり

き又鶺鴒はけり鳥<sup>かきす</sup>のどん

るることつし鶺鴒乃目<sup>め</sup>磨<sup>こ</sup>れ

目のこぼり<sup>ぼり</sup>きいたとへあど

ととり<sup>とり</sup>結<sup>むす</sup>へ

いろう火<sup>ひ</sup>や鶺鴒<sup>せうりやう</sup>の地獄<sup>ぢごく</sup>の火<sup>ひ</sup>もたれ

水鶺鴒<sup>みづせうりやう</sup> うみく

いとくせとをきりく

やうにあくもるれハ

あもにわきくく多<sup>おほ</sup>鶺鴒

とあもゆる俳諧<sup>はいかい</sup>神<sup>かみ</sup>ハ

うしひつてきんらう

ふあもやうあもひあ

そのうまたいつまいつえ

くいあくと

そあもたつてきつえあつあ

鹿子

さうし物<sup>もの</sup>くあやくハ

うし子<sup>こ</sup>さうあハ

あつかりとらんをさとの  
くりし系うたこはるうの  
こちりめゆひふりめ申ひ  
あと深物のえんいひさる  
作のちうさちる

夕歌  
ひきいん  
かろこももや布袋のうらほは備

夕歌  
ひきいん

又位の上のあふいひうら  
せぬといひあうりして  
さうくあせうりつりれあ  
ぐくやあといひえと乃眉  
あうきかされるやうり  
あどいもいいてまうやと見  
ゆうりんとといひきいん  
何せともんるん

夕歌  
あつかりとらんをさとの玉うら  
きそりぬらうり夕歌のえんあ  
あさかりとらん夕歌のえんあ

夕月  
うら月のあつかり

夕の新乃涼さどめつら

るのらまきをやーとく。  
めくはハ扇車やとくも鳴門  
や落月月の母あともつ  
ぬ時あゝぬお雲氷り見え  
あいで野山海川乃守ー  
まこと

すじさかしまらあも氷書  
月熟何きお北川ぬれ  
月乃梅あつる扇くる海うか  
夏れ氷あるこも落月毎見え  
夏の氷月おとどく氷一浦

氷室

いしらち かしらや戸  
いのかれ

ひー額田乃にやいまこ  
闘雞とりよあよ特ー  
きるに中申りー氷室の  
ああるとんはあてやそ  
帝へそ氷をなれあハ  
あり。圃こおくり氷室を  
とれて。熱月よ月ひわり  
まーけら。乞ひひろあ  
御洞の権與とるやとり。  
いゆお家あるーーお  
こおれき朝日今こら  
のを氷りあえてつん  
ひよ地ー竹のちまは

氷りしををかきこらひ。  
夕ふハ氷りしをらいうか  
なるともいつり又正月乃  
かまどこのかり網とと給  
いふふりも何あり。

東門初とし云死せん  
ふしに流布らぬ世  
事家も神や氣向乃むの枝も花

嘉定 からきせた

こか所も十一日目の禁裏  
とつしめ云あういり  
嘉定念言物せうあふんあ

あり。志もふり志もあ  
んしは。嘉定志も穢とて  
十云又けの残せれあ  
すきくくろくご物あか  
とくぬて。人あもら  
ふらうもらひぬ

こかつきころ十六日月蝕  
なりされん

月もこらひ志らしあむ嘉定念言

標 交れせし ころせし せとれ羽れ  
せしとあ ち琴

標あし登乃標りし  
阿まういにくくや標ぶさあ

ともしひひあし 樹上乃叱げん  
 の夢のまゝあゆみ家とんこゆ  
 ちこん。あももーぐさうりうま  
 ねせこあともりり。狂げん輝  
 ち乃翁の名とんこもあつ。  
 ち輝乃わま屋やう熟りもあふ。  
 又輝の音を表あひらしてい磬けい石いし次  
 作しまうととちやもりり  
 ちあそあまひあつち輝がまう  
 ちの中であつちうちせと色  
 から夜せも掛かあち痛の板  
 ちの世も屋あちやうちあつ

石竹 しのり

床夏

撫子 やましろそー、かまそー  
 月あるそー

とこあつち床とより入いてい妹いと  
 あわるともよあれハ能た相相  
 あもぬりあつちせよ花はな島しま  
 あとちり。又とこあつち  
 やとちりひひりゆゆ撫子なは  
 お鬼おによそへてあつちあわく  
 ちゆりあつちあつちくや  
 ちやうちくあつちあつち

しのぶささきとさかかともろくさ  
 手わらぬ井。虎とつるやう  
 石の竹あともせんまゝんて  
 花とともそのふさふさうく  
 似よりひんげ比もひららるれ  
 えがく引何らせてとまろく  
 つませきちく強氣れちく  
 ひとせふちふらふもひんげ  
 らまふらふあまふもひんげ  
 さくはやぶくそかひんげ  
 何げさうけりる人り  
 何うりーまけ

花の友奈

花の影とこも鳴食完若氣花

あまらぬおろも風若若氣

蓮

- 白蓮 紅蓮 荷葉 朽葉
- 浮葉 葉葉 赤池 淤泥

あふ

くらげに蜂あしと針りも  
 ソひうけ。蓮花等蓮花  
 あどよせしてとらり。又九  
 果の蓮若とも中物娘  
 手織さともおひよ勢作ら  
 粒を液れ葉若のふあけり  
 かがんをせゆめておれ志子  
 といふあふんを志子



風が吹くらんらんわが舟も多々二葉  
草花あやむき<sup>あやむき</sup>あやむき何なる<sup>がさ</sup>言は

夕立

あらしあそい いかげら  
いさひくろ

ゆふぐらふ太刀にひびくは

こぶれあきさむく元々心せ

きりり指さぬやのわり就あ

ととひひ。又いするかこま

音にあれげとあうらら

ゆふくろ流るるくくう勢乃

氣あふとととひあ

三とくりれさも<sup>あや</sup>目<sup>くま</sup>見く

ういさうりげあき<sup>す</sup>き<sup>す</sup>き<sup>す</sup>き<sup>す</sup>

きとあふとととととととと

あうりくくくくくくくく

きりりあふとととととと

くくくくくくくくくくく

あふととととととととと

作とらう

ゆふぐらふくくくくくく

ゆふぐらふくくくくくく

せげとてととととととと

夕立のあふとととととと

納涼 あふとととととと



えんどもあ〜一かやう。うひる  
 張やうれ志ふりはあつ。  
 廟うらふ乃作さあやうく  
 似ゆ〜

風とあやひそくにひく廟  
 緯<sup>アヒカン</sup>云はれせであつたあやうく  
 月教とまにもおきあやまき廟  
 はらうく廟やまほ<sup>アヒキ</sup>きより  
 骨<sup>アヒ</sup>とらえくらあけ何廟より  
 けつらあきやあだの地がなり  
 核<sup>ニホフキ</sup>ごらん まう〜  
 又ら〜 ふ〜核

ニホフキ門 茅の席 何の葉  
 沸き流

右の百<sup>アヒン</sup>女〜くを<sup>アヒン</sup>来<sup>アヒン</sup>産<sup>アヒン</sup>門  
 よあ〜くらせとらぎん  
 一とぎ〜あより  
 一とらあつきいあ〜いけり  
 一と〜あつらあやもほこ  
 一とりれ目あ〜あや  
 一とて。あやあ〜を神  
 一とひげ〜。こもら〜が  
 一と〜あせ〜あつす  
 一と〜あれ肩の貪<sup>アヒ</sup>之<sup>アヒ</sup>神<sup>アヒ</sup>次<sup>アヒ</sup>  
 一と〜あつす〜あつす  
 一と〜あつす〜あつす

乃ありしきもなむらへ  
あといふり

一巻やうまれつまはるゝひ

せはあそなりのせりやみうきつひ

何れの日う頭陀袋づつたをわらへはたき

山之井秋部

初秋

文月 けきん



きれふ乃えにうる朝爰も  
ゆくねど吹風もひやりと  
けさの月にあられよりがれ  
るし〜手足もたたりか  
ひきこふ家あつこもひらね屋敷  
を忘れわするれぬ病も夕乃  
虫れきも漸やさび〜この  
かされきら〜き〜あされ  
桐も柳も一うら〜り。あ  
知れる池乃ん〜あ〜と

はくらぬ。文月とひびく。  
うらぶが等々してあどろ洞  
とも踏<sup>ふみ</sup>ひ。又踏<sup>ふみ</sup>とひひり  
うへてとひひり。立秋と  
りふ歌も。彼立<sup>た</sup>まはれんを  
知<sup>し</sup>ぬへー。あやまひ通<sup>とほ</sup>り  
てとひひあせり

らびりたをぬくちあけをわ  
んぬきもへんぬきもあはれ

風<sup>かぜ</sup>は丹<sup>に</sup>家の文<sup>ぶん</sup>月<sup>げつ</sup>のさる。うら

七月七日

あーめん うさる  
事<sup>こと</sup>半<sup>はん</sup> 獄<sup>ごく</sup>女<sup>にょ</sup> おはせ  
箱<sup>はこ</sup>

かきまのうー。 あはれ川

あむ久<sup>く</sup>あや 乞<sup>こ</sup>切<sup>き</sup>真<sup>ま</sup> 乾<sup>かん</sup>糸<sup>いと</sup>  
握<sup>にぎ</sup>乃<sup>の</sup>糸<sup>いと</sup>

今日<sup>けふ</sup>いまが節<sup>ふし</sup>供<sup>たて</sup>よてせり  
索<sup>くわく</sup>餅<sup>もち</sup>と月<sup>つき</sup>ゆる事<sup>こと</sup>あり

言<sup>こと</sup>れんセツルはりとして  
香<sup>かう</sup>煙<sup>えん</sup>りーらるるあ<sup>あ</sup>茶<sup>ちや</sup>此<sup>こゝ</sup>

ととに柱<sup>しら</sup>とてきそく庭<sup>にわ</sup>り  
とていりいられ糸<sup>いと</sup>を竿<sup>さか</sup>に

ひげそ福<sup>ふく</sup>がひ乃<sup>の</sup>糸<sup>いと</sup>とてき  
ととひりセツる鹽<sup>しほ</sup>りー

あをいれて。大<sup>おほ</sup>え乃<sup>の</sup>目<sup>め</sup>を  
ひりり地<sup>ち</sup>らるるあど

のあ糸<sup>いと</sup>とあり。お<sup>お</sup>茶<sup>ちや</sup>此<sup>こゝ</sup>は

書さしりし言女も糸針  
 争い月ひわち此姉のめ  
 びくくももらいで  
 おこしれんづもかこ  
 につあはくも向一する  
 事一あげてりえくは  
 されんセ夕ちゆうせきに七書りく  
 らんともおしあしきむ  
 かんさんおどしおどやう  
 あとつりこよひひつこ  
 つ君星はるすをわるまよ  
 河東かとうの義人ぎじん天帝てんたい此こじすあ  
 りくきむむ乃のねとあるよ  
 へくへり。志しつつ何なにれど帝ていお  
 獨ひとりわくわくくににららここえ  
 親おや父ちちああ帝ていをを機はかりと  
 あひくあひく河か西せい乃の豪こう牛ぎゆう一いっ史し  
 に嫁よめ志しああぬぬよよそれそれららり  
 織オリ女むすめあありりひひけけつつくくひひ。髪かみ  
 ぐりあどあどカカももささららりりよ  
 カカととななりりてて機はかりああるるららり  
 ををももららちち機はかり父ちちりりああららん  
 えんえんととももささひひくくはは天  
 帝てい又またももををいいららりりててせせめめて  
 よよびびかかへへてて帝ていののめめややと  
 乃のかかいいままににああららりり

書さしりし言女も糸針  
 争い月ひわち此姉のめ  
 びくくももらいで  
 おこしれんづもかこ  
 につあはくも向一する  
 事一あげてりえくは  
 されんセ夕ちゆうせきに七書りく  
 らんともおしあしきむ  
 かんさんおどしおどやう  
 あとつりこよひひつこ  
 つ君星はるすをわるまよ  
 河東かとうの義人ぎじん天帝てんたい此こじすあ  
 りくきむむ乃のねとあるよ  
 へくへり。志しつつ何なにれど帝ていお  
 獨ひとりわくわくくににららここえ  
 親おや父ちちああ帝ていをを機はかりと  
 あひくあひく河か西せい乃の豪こう牛ぎゆう一いっ史し  
 に嫁よめ志しああぬぬよよそれそれららり  
 織オリ女むすめあありりひひけけつつくくひひ。髪かみ  
 ぐりあどあどカカももささららりりよ  
 カカととななりりてて機はかりああるるららり  
 ををももららちち機はかり父ちちりりああららん  
 えんえんととももささひひくくはは天  
 帝てい又またももををいいららりりててせせめめて  
 よよびびかかへへてて帝ていののめめややと  
 乃のかかいいままににああららりり

せやうしー ぬいぬい ぬいぬい  
 ありきさちるれいしひ。鳥籠ツルカケ  
 来て銀河ぎんがよこしこらり  
 つく橋とあり織女オリヒメとつり  
 ちくくわひぬそしひあど  
 ゆく。としおひと水のわよ  
 とるれん。祥ゆきものかごりふ  
 流星りゅうせい乃教しよあもわまる。依か  
 ね振うハつり志し川波かみりあ  
 かぐんぶくつらまもさうあ  
 くりひるぬくしーら  
 であたさしきしつあれ  
 ち友とも仲人なこうどるまや宵よの月つき。

ま男おとこあれやよごひや  
 あともしつり。又また常とこ牛うし織オリ  
 女おんな乃なたにうて。とししづめ  
 志し目めれてあやもも。うな  
 きぬくろてさりあ  
 としひゆんさふらやこに  
 か井いれあさう人ひと祝いわいとつり  
 ひねをきそく。早はやしよま向むか。  
 振ふる乃の義ぎりりあうくるあ  
 とゆら残のこ振ふるの紫むらさきふりけ  
 せんさう。あ。そよ。七夕せつせき  
 乃の屏かざり風かぜあどやうに。  
 それくれりさよはは

ぬきく

七つ子のよしれもわおおおおお  
 から業にけせたるせんをう  
 七又七えんまのれひとよけおん  
 うれつものよしれもわおおおお  
 りひのうづぶもくもぬ  
 だたれくあふ川あ  
 こふの海うりて早しれあふ  
 せむれ一とるや世俗のひ  
 あらうせり。滅くしき  
 飛授いんゆくぬと。えん  
 らかりひてかりあひる  
 えんるいづらんよは飛授  
 乃らひおりてさひさり  
 ととつこあうへ

盂蘭盆

玉まつり 奉靈棚  
 ミそりき 桂 葎れ飯

わけとうち まいとうち きりことむ  
 をうり火 施餓餓 ひやうり  
 ふきむろきおれとり  
 るり二途り 救度夜つか  
 協とまれと。とた七月は  
 うらかんよそくくこれる  
 のうへにむを徳を徳へ  
 あひ。おまあがらひかぐま



てともあがりく乃持佛の  
 ありしとよき業枝豆根草  
 あどおせきおあてさして  
 つり。松破子らさやう松の  
 物洞へて身よりくれん  
 せくハさうさう。きこぬ  
 きこるれし。そ縁は界  
 にいさるさうそあさくさ  
 里ゆく。されどあせづま  
 ちくく火乃車れさけさも  
 うらぐんらむ人ぞくア火  
 光りいらくやこれ地獄の  
 中ひあうんをらひやり。

麻くられ杖けくせんよう  
 りひ婆を悲し。こ煙は新木  
 乃どとき餘魄くくを何  
 られこ又蓮葉よがうめく  
 病をのろん人むり  
 あをへわえさせんささ  
 病けさをあ神志洞り  
 らせ入て。さうきこをら  
 んあとするし  
 西月いらし。さあちまうろを  
 かあふいわらひ身代まうの政  
 罐ハ行と時し。こく福ど  
 来芳罐小町中りあどやう







風やたきのりくうへんも  
 海舟のまき船もや藤の葉  
 阿曇の風はまはるも藤の葉  
 ささくれた花も藤の葉と  
 藤の葉もまきふも藤の葉

落

赤すき 花落もまきふも落  
 赤すき 花落もまきふも落  
 一りすき 花落もまきふも落  
 まきふも落も落も落  
 落も落

からあが神とらひひへんも落  
 のまを捨ひられらり  
 うり神とあふ 水神つが神

あどもしひあ。赤落  
 からあが神とらひひへんも落  
 のまを捨ひられらり  
 うり神とあふ 水神つが神  
 もんあ。落れそめ風  
 うり神とあふ 水神つが神  
 わるう 羽落りへんも落  
 赤すき 花落もまきふも落  
 赤すき 花落もまきふも落  
 阿曇の風はまはるも藤の葉  
 ささくれた花も藤の葉と  
 藤の葉もまきふも藤の葉  
 赤すき 花落もまきふも落  
 赤すき 花落もまきふも落  
 一りすき 花落もまきふも落  
 まきふも落も落も落  
 落も落

山並紫草のしほのまはれ赤葉  
あつりけり日な夜よし

後きやうのひまはれふのひま

萩 赤い萩 しほりくろ萩  
野萩 まら萩 小萩

萩りくろ 萩りくろ しほりくろ

赤く萩 萩の綿 萩の花書

萩がえ 花より衣 萩の下着

こやぎの えろり一節

ときろ花としほりくろ

月の極めにくろへ志よりく

ろみしきしほりくろ

又ときろくろけりくろ

とくろへ萩の戸萩どれ

あどくもよりあてりひもふ

くに萩の花衣はまらつが

くろやともしほりくろ小萩

ろけりとりくろまがら

とて鹿のはまはくとも

くろくろ萩のつりくろ

ともつともあまをする萩

やめしき草。小萩やこり

けりくろあましほりくろ

仙念せんねんあましほりくろ

草がりに萩のふれあまら一節



て。落どのの陰にふるさど。う  
 わきつとつひひ。女にむり  
 嘆きよ。芝葉とひの、う海  
 つとらうひ。まらう。もく  
 だらう洞とも結。うりや  
 めづるよ。なぞ。うらぶ。神音。が  
 うらやう。まれ。かけ。うら  
 ど。と。ひ。葉。看。待。と。も  
 うへて。ひ。ゆ。く。又。ま。ら。う  
 らん。う。く。れ。葉。村。り。か  
 れ。一。ひ。ご。ん。や。う。う。丸。り  
 修。り。よ。出。り。一。から。ご。う。ゆ  
 と。と。ら。ひ。あ。一。ゆ。く

三つと花とりのけけを葉看待

秋の野にこのね書きくまらんが葉

朝顔 葉牛花

何さぐやハ散り。たうりて。  
 露乃くまれ。と。えら。や。と  
 りひあ。一。ま。が。め。る。と。ひ  
 さいれ。ま。じ。と。と。ん。あ。せ。り。  
 かな。や。ま。れ。あ。た。う。り。て。何  
 ぶ。や。り。あ。く。ね。と。れ。の。あ。ら。う  
 と。と。と。又。歌。花。の。あ。ま。と。よ  
 分。葉。牛。花。の。し。り。り  
 つ。あ。て。の。れ。の。す。く。れ。き



勢も抑ひ又日乳をま  
 ぬけりりい痛かむれを  
 乃かぬるやどとんれ  
 こむるふい世れきとん  
 あもい

何さかたにまぬる痛かむれ  
 物龍やぬきとぬるもの龍  
 志つるや日と物鳥のつるせ葉

痛  
物鳥 やふ痛 家れ玉  
 しく する 結よ

やく一葉にまぬるとぬり  
 乃光へくもてうい  
物鳥 物鳥まういむん乳錢

如急痛といひきとて月を  
 やど一すけらあともかむと  
 んあーやまたひうる錢。  
 うむおともといひたの底。  
 又あひきあふ花檀り。  
 家あふりふをわもがた。  
 又たのふあ乃ろわらうか  
 子執を何一とれとあ  
 乃痛ととれ製り。せん  
 ぐりれ世とあひ。そき幸乃  
 風ハ何とこころあ痛の  
 男とこころあひんてへあ  
 せん

娘の如きあしきも家や丸はり

かるちま家いれ海にむげり成定

意乃百韻り

秋津別いあますけとく許の家傳

音

あゝ音々音川霧 落音  
うき霧 八音音 音々ん

霧のこゝ

音々ん下

うら

こしらへたりとる海とらう

韻

音いよらげぬる海にむられ

く。海をいハんえすすて波

乃きれとげぐらあくる

こ。浪をいこど急もかく

きそ。かみんうりげんご

とれるつりさ海をばく

ね。音れ海とくして。世界

乃ものハ人美とひひ。お乃

をうも何かといひ

るんんん。於音あんあんと

いひくいな本の紫とんぐ

をひひやり。夕音とくし

いさ井の底乃何よんが

とくとおろうこしうつら海

あぐも

まはる音や一夫海流

芳の海は世界は人の業や

山く波のうりり芳の海は

鹿 きしりきしりすく

きんくろと 兼帯にる

つまふひいさふし 萩原

とら山田 かすり 兼野園

兼帯とらひいふ程のくら

つととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

ととやうせ様乃やひ

雁

初雁 孫雁 三はくり

是舟の雁 きのひち雁

旅雁 落雁 群雁 海雁 白雁

むつさ 文 筆 帯 石 糸

りくつ づつ 雁 群をたあつる

はき 平海 とこよ ころち

是乃 雁よつ ころち 雁

帯とともあ 一月 雁

ひつり 雁 雁 雁 雁 雁

とつひ 海 雁 雁 雁 雁

ころち 雁 雁 雁 雁 雁

をたに 雁 雁 雁 雁 雁

つひ 雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

雁 雁 雁 雁 雁

天門よりかきし 頼りし  
 りくそそ 平沙乃ららくかき  
 よやとらとらひつづりゆる  
 文月ふらふらるるははは  
 夕急可よきおはらわああ  
 夕急に西井れらわああ  
 夕急かひひく骨の骨字  
 とまらや歌と歌がやう文字  
 月の赤とけしにえらるる  
 かりがぬ秋風雲とらうか  
 飛ひるるる草虫はく草葉  
 新ちくともうおぬらう字  
 橋のそとらりいららるる  
 白鳥と世にのんえらるる

八相

白鳥と世にのんえらるる

夕急かひひく骨の骨字  
 とまらや歌と歌がやう文字  
 月の赤とけしにえらるる  
 かりがぬ秋風雲とらうか  
 飛ひるるる草虫はく草葉  
 新ちくともうおぬらう字  
 橋のそとらりいららるる  
 白鳥と世にのんえらるる  
 夕急かひひく骨の骨字  
 とまらや歌と歌がやう文字  
 月の赤とけしにえらるる  
 かりがぬ秋風雲とらうか  
 飛ひるるる草虫はく草葉  
 新ちくともうおぬらう字  
 橋のそとらりいららるる

月

夕急かひひく骨の骨字  
 とまらや歌と歌がやう文字  
 月の赤とけしにえらるる  
 かりがぬ秋風雲とらうか  
 飛ひるるる草虫はく草葉  
 新ちくともうおぬらう字  
 橋のそとらりいららるる

くら月 かり月 月 月

三月 四月 五月

月の鏡 月の音 月れうま

月の朝 月の極 月入男

月れうまき 月のあつ 半月

月の端 月の差 くら月

七夜まら 廿日あう 廿三夜あう

あつりる かろく よあつれ

ひうり ぬきり すす

まわらばあけき くら月あま

くら月 くら月 くら月

月宮天 星天 天宿 あつれ

田とれ月 くら月 彦沢

三の月乃きしんめる 氣と

西方又佳世操ととと輪に

腰あどとととひあ 山歌

乃こゆひあが くら月

の海北つりなむとととと

くら月 くら月 くら月

あつれひるあつれあつれ

くら月 くら月 くら月

くら月 くら月 くら月

くら月 くら月 くら月

くら月 くら月 くら月

くら月 くら月 くら月

鳥籠の橋れあつれ くら月

とくしひひをせ。とら月  
 乃新よむくひて。夫世は  
 びんぐこと。山姫ひめも  
 梁はら見とくと。あ。を明  
 乃光り。と。あ。つ。あ。と  
 うん。うひの氣とさくはき  
 とひひけ。又あるび。い。  
 まる。と。び。う。あ。ご。も。ひ。  
 あせん。同。能。の。う。り。の  
 り。る。う。あ。れ。ん。あ。わ。く  
 餅と。あ。う。く。す。る。り。  
 う。せ。又。か。つ。の。美。ま。の。ち。  
 う。ひ。う。と。と。ひ。ひ。け。の。り。

う。と。う。う。う。あ。是。り。て。い。は。  
 あ。ど。き。う。あ。の。あ。月。意。  
 う。れ。ま。あ。う。と。ひ。ひ。さ。  
 あ。り。と。む。か。う。と。も。あ。  
 乃海。あ。う。く。げ。あ。と  
 是。い。ひ。ゆ。さ。い。も。ら。月  
 と。六。十。日。目。さ。り。う。子。残  
 り。て。る。あ。と。ひ。ひ。け。あ。  
 帝みかど子。い。も。よ。せ。あ。と。あ。秋  
 乃月。の。秋。の。と。あ。う。あ。れ  
 ん。ひ。う。り。あ。ら。ぬ。り。こ。こ  
 て。海。川。と。こ。子。と。め。べ。  
 世。も。ひ。う。り。あ。ら。ぬ。り。

高ぶるべしんやうりて  
 ゆるらるる文受級ゆ月よ  
 申ふあうりうりうり  
 わくうあききききき  
 けくおて新月もさ月  
 とまらりりり九月十  
 二條の葉か目とももあ  
 多月ともとも又あ  
 衆の月及のいふあど  
 にもかにあはるる  
 めあむんてあひんり  
 うりてうりうりあも  
 他は月のみあききき  
 くらへるるるる。たは  
 かう月れ白のうりあ  
 ようりあうりうり  
 残るるるるるる  
 せあきんてあきき  
 らるるるるるるる  
 せあきんてあきき  
 てんあきんてあきき  
 二日月もあききあき  
 吾我海のそいあきき  
 めあきんてあきき  
 ああきんてあきき  
 月あきんてあきき

くらへるるるる。たは  
 かう月れ白のうりあ  
 ようりあうりうり  
 残るるるるるる  
 せあきんてあきき  
 らるるるるるるる  
 せあきんてあきき  
 てんあきんてあきき  
 二日月もあききあき  
 吾我海のそいあきき  
 めあきんてあきき  
 ああきんてあきき  
 月あきんてあきき



ありしわづらうる月れ  
 衆目と發差の四一月の氣  
 せとる處より月とあげ六  
 月のびとさあふあからん  
 色に白の徳おんがうの紫  
 こらじあせいりあふ月も麻草  
 りらあらうる月の海とさうあ  
 十又衆よあうりたれと  
 々やうふ無草にらまは月れ  
 月いらあふあなげんあかき  
 十又あや月のれとあふびと  
 中<sup>ど</sup>目りせりうと<sup>ど</sup>懸<sup>ど</sup>骨<sup>ど</sup>あを  
 めとまうひさる此

の月とれあふあきりきり同

八月十三衆よあうり

くれと

少るきりあふあはあ月のあま

さいうひの月とるふと

さいうひの月とるふと

八月十余り只徒名あま

月とれくがれわりあて。

十又日にいはの國次六

の浦よあふあ日の福ハ

ころかこころああて。

昔つうこころああて。

出く一衆のうりつる。

彼らよがし此等の秘も  
あひおて共々海へ入  
涙ぐまれゆるりくも  
いよれ清明あうく月  
をみしやすきま  
らん

十又米と前物うはる月同  
中物その平此住給い  
西、後<sup>うしろ</sup>祥<sup>さむらい</sup>あま山あひん  
くしにつくくろ尾あひ  
月見あはれと名付てら  
と一村ゆり

松よまじや月も三糸中物同

つらてらまし後の名月  
月とこらひ三佛<sup>ぶつ</sup>りひり同  
ある較のまがかそへん梅の月 丑秀  
月の氣あかろやま林かろへ 善信  
志くがきとへん月見り  
あうりて

こよひとみらひらん月やま各共  
九月十二日より月見三  
を志ゆしよ  
るぞゆぬを育えやひこのも同  
いのちあふ又のさそふる月同  
ら月乃親を急たよへ  
あつる節とふ合せく

陰はゆるゆるやうに暮す月之圃  
 ちそとにいでわう。か月夜集  
 如くつらういひのちや明月記を言  
 十をたうこまねのつぎめり之次  
 夜回めくかれも月やせん、一 瑞雲  
 くとゆる月をたてて

重君ゆく月たもくを面白や 真重

小國にて

月早やみ焚あ。おれはあめん可  
 着お連袂乃海坐り  
 初ぎえの月と世に出るひさき良重  
 秋如堂よりしやーちちら  
 の月と

月やこころひ十九かあ乃新ぼし一滴  
 かさくになつづえとふ月の常倫  
 月乃極く八月中より又百  
 丈心未何り。を未れりと  
 に人あり。性ハ吳名ハ剛。是  
 を月人男とくと極男とも  
 いひゆと也。月乃誓とては。  
 月と如 玉蟾 言とこと云て。  
 かつら乃をとりとくちなり。  
 月夜を鬼とて白兔とていふ  
 小付てあふん。月の嵐  
 とりよる。そおあふん  
 くらぬくおふりり時り

志るがひてくらがかる事  
あどくはうくんとみひ佛あま

八所御霊祭

上代里

下代里

八月十日八所御霊祭  
清々こあどく何やうさ  
つちゆる津よもとかこ  
まはらるふいひこの  
しきかひれれど  
あるかさあつらゆる  
系乃しうりこの  
くれとらひくわされゆる  
そはこそあつらゆる

中女祭

下京に一町はま津り  
つとめゆる中女桃  
名をえる海桃  
ゆゆるるり

津あつる身もゆりや中女桃

接衣

碓氷  
わやまき

風乃さそひてきあ  
きよを里乃あ  
あひやりの書あ  
うら歌あてじまびし

夏乃つらうがかるるを  
 志すかろくころとけれ唐  
 衣のるをうへ志くせり  
 ひびる白絹をひきさく  
 能くといふりよりりて  
 初尾乃流り指子おひこ入  
 びやしあどらひて出度  
 ろうへんをといひし  
 作ら

たろかおるらむつら  
 山をきあつてたれ指子おひこ  
 礎を探歌ましくりて  
 うらねあるきあつたつてふ同

虫

しをえぬれをねり  
 書りきりくはむり  
 ろうりこふきや楠根  
 こふ虫いさくも虫三れり  
 ぬらき虫虫くり籠すく  
 ようくもくもくらんらり  
 つつとせあま

虫を撰りよはる人きり  
 暖勝野もろりに道遠  
 情く虫をねて籠よらて  
 大月にまのせり  
 とせいおれ世もかろ侍  
 なほこつてかろりこ

めくくくまうつりつるさ  
 きだむりくつりつれ  
 山乃べのうきいし  
 けりくわんごうれうが  
 ーぞうくろいよこく  
 志しめけりつる海文をも  
 が象を命よくすく心  
 らへられゆく秋を母  
 ぶすする乃べれあられさ  
 ともしりハ湯よらせて  
 撃ハあまめとと又次  
 みてハ萩が筒あやり  
 かきことうさうい松り

ハ松よたうりてせんざい  
 ふりくぬねりりさあぞ  
 又人まのしりとうへも  
 けりつる約つあまの響  
 乃音をきく老人ぎさ  
 むよらささるしり城  
 めこれつるかたし  
 坂中まり入れぬうき  
 玉玉船乃けりつるあや  
 とあまれと壁乃ら  
 をつづつとせし  
 憔悴乃きりし  
 けりれが鬼を

らうしよぶとさうし  
わんちうわぐうむけか  
りりし海いぢぢりれさ  
らととぐりらあどつ  
ぬゆる人ー

かこにちねどくわの夢  
約しよきまにさくや響  
鈴宮の歌にまきあふり  
相とさくわゆるりぢく  
人さるいん

虫好むさひあはる夕  
色鳥

かう軍がうひう  
こころのきまらる

ひえき ひと ひまひ あり  
しきき 菊うきき ぼく  
しりき 小き海く 庭籠  
にりり えさー せん乃わ  
もあひ きやー

秋乃野山うりまうりて。  
しききぬえのこをわ  
そひかきまどんぐり  
中ひんじんひえを捨いり  
ひえまの残やぐー。あえん  
ぐさあしああま残を  
ひ憶さてい。又山ぐらね  
娘づらとをばらてあひ。

けづらハぢぢくーに  
 ぞーづひもあどもつ  
 ねねやえそん海づらひ  
 きのんを感ー。きり  
 見らぬひぐーをわれ  
 こらあまーそんはづぐ  
 ねづーとあつちあま  
 くらあどもひあひく  
 軍がうも海どあ山路  
 鶏 かーうー 若うー  
 うー乃とこ うーか  
 鶏合 鶏家 うー系 うーら  
 うーまね あら まのうに

うー系

うづーハ尾乃こー。か  
 なるれん二撃ハ何ありか  
 とあーとあひあひ  
 志りーああーともひ  
 りーとあひとたー撃  
 父あも乳にもろへえ  
 けーああ。あもあひ  
 あもあひひり。う  
 づーとあひく。あ  
 乃あーとあひく。あ  
 うづーああーとあ  
 乃あーとあひく。あ



ひく聲にのまりかみかき鶉や  
あまひくしてきりこゑあふ鶉や

鶉 山志き、 姥鶉 川原鶉  
くひつき 鳴りえきり

うきうきい

新にとまるかき鶉とと  
がめ姥鶉乃たのあふらぬ  
とまきいふらわいしきいどく  
志ぶあどくへても

やんこふあふれここと  
まて鶉志きとと  
さうあにさうびりれと  
とく志あふれあふれ者や

鶉

鶉のまきこ たどり 中

鶉ハめをわひてかとりり  
うけておき鶉をねおし  
あめれ自あどられあに  
けいともとすところく  
かつるあどとひあ約

あにあくも鶉やうひのまきあは  
とすとくえてあふ二ひきあは正六

紅葉 初紅葉 うすもみら  
やーかの紅葉 下紅葉

村紅葉 うもみら うもみら  
梅梅 梅うもみら

昔の祖久紫 お紫のまゝ お紫は

お紫乃土忌 瓶の極 ぐく

うしろ かつらぎ 又あうらう

岩綿 商ぬぬ わく 立四

ら流 通天橋

常盤山乃乃の何ふを松を

時ぬれをあーまとうー

がひ。あらの森よしてこは系

うむふ何けかとお中ー

又山乃尾れ久津々々を赤人

其心なにあせ榎のこころ急乃

そのぐく何ふか城入丸れら

ーのひあー。又梅がえ

乃ふもいつるふそのが酢城

さた金にこといひ橋のお紫

い又花をやるあといふ家ん

なへをとまべー。すべて万本

乃又何るぞぞおよつあて。

あーきこくと何ともいひ

あいで。あかぐらうーお紫

といふざれとと落れま

あけりゆくれ

う海島にあせてあをれお紫が

下口上口下口座あや村とみち

紅葉して又をどや何橋うれ

源氏酒よあひてや久お紫は

昔の頃あてにたつたるさ来るは

お茶ももどくもききき

新芽をたよめるもや柄お茶もた

ひえ乃やまより乃ぼり

ゆー時ひくみへり

お茶のちりけさよんゆ

山風やお茶たてく火さき獄いり君

さゆり茶たてく下真茶葉お

又茶とりよもあひさ

よしてゆさるもわこりお

にいそんともちりあつた

つれさくこあぶとせさ

ひたひたよりひたひた

花よあはかおんさんいらは

たぐやまかきこえてるは

七葉乃かていさのいらは

人のこととらうかあうら

とりよ葉を鑽くお

いろこえひるあはかおぐら

秋のせいえ乃山れ葉よて

えつらびあはかあすをもひ

楓にいろとりひゆくでも

まよりせゆくもにとらう

てらるあをばはゆんら

みいろげくゆつまへにあ

もつらるもあんり風の

えんきとひひ。久をかして  
あといひくもくしゆ  
且風らふふへん風の楓が

九月九日

重陽高 茱萸袋  
菊酒 菊の 菊酌

去く菊 かく菊 玉のしる菊  
うく菊 金菊 狸：大白 楊子妃  
ぬれ菊 菊合 菊之子 菊の洞  
菊島 星カ筆 ありか ごとめを  
ふかよ へんか ぬき 子重十六重  
山海 菊 霜 菊谷 南山

「六節」日るんはあやうち  
は菊のあはれあはれ

てこころち上達部一ぬりん  
はくり 待秋をつくぬあひ  
又南殿乃序帳はな右り。  
茱萸袋をくけ。菊瓶をを  
くく 俵式あといゆるあひ  
るん。町方の人あぬりも。  
そま方ちりあがくへん。  
しんとくり乃口あといり。  
菊とはくく用ひゆる。菊に  
あてくく文切袖何ふの意量  
か山踏乃菊はあよ鈴をたへ  
しあささるり。費長房が  
あささるりかこねとてあま

ありきりーのむ菊志の  
 下口もらしせよあどいり  
 心とりひゆる。又ありーあし  
 乃ありー測しりひれ程々  
 乃さふいふれあしはぢの  
 しれーそらさーもいさで  
 ありひーとらさーもれん  
 ぶんあどさーあ菊と際し  
 けら

仙人の世界さ美はあうら  
 病さひんよきき此坪の肉  
 かせはい菊乃白ひれとせこ  
 はい社のうあひのあさ菊のあ

菊園の下口と上口の測測也

重陽の日

法と事家あつりてたがふ福喜海あ発  
 菊乃九句と志行ーよ

酒どさへえのの菊池ちの言  
 亦もさう物さうれ節せう供くわ物ぶつ正式  
 秋の波にあれさるれや菊井測良保  
 えささうささてさうれ菊く花はな可か理  
 かさ菊もらう六秋津つにら水屋信  
 久よ又及祀神とく。京ささ  
 いらのらあささーとかさ  
 せして禁中仙洞と卯宮を  
 とあささよさうりてあさの目

おとく海りてのりきんたか

九月廿

秋の暮 ゆく時  
かづ林

何きろくれにせしゆくんを  
りくも夢志にがれやされ  
おんあえりてんりしと見  
ん庭たる也にむいる程た  
が秋のくもき<sup>まが</sup>兼よりら  
<sup>い</sup>兼<sup>ま</sup>あいらくか<sup>ら</sup>わとえ  
し<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>り</sup>  
く<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>ん<sup>り</sup>

まらんあゆみ

あゆみあゆみあゆみあゆみ



山并云

冊五終

